

ぎゅうにゅうなんか いれないでさ さとうはボカボカ ぶっこんでさ
ひとくちのんだら かためをつぶり きょうのはすこし にがみがたりないね おばさん

阪田寛夫さんのユーモラスな視点を感じますが、これを小学生の子どもが音読として声を上げて読んでいますと、思わず笑ってしまいました。そして、我が子に言いました。「子どもってそうなの。早く大人になりたいの。大人になると大変だぞ」と、子どもの夢を壊すようにビビらせてしまった、イヤな親だったな、と反省する思いですが、この詩には、子どもたちがあこがれる大人の姿が描かれていると思います。でも実際に大人になった私たちからすれば、子どもはいいよな、と思ったりしているのではないのでしょうか。大人になった今は、責任もいろいろついて回り、う～ん、現実には厳しい……というのが、それぞれの心境かと思います。

大学への進路をめぐって

もう一つ。私の苦い体験から言いますと、私の知り合いの女の子が大学に行くことになったのですが、彼女の場合、志望校は受からなくて、いわゆるすべり止めの大学には合格し、そこに行くことになりました。私は、「浪人したらいいじゃないか。急いで大学に入っても、結局4年で卒業し、すぐ就職活動だよ。そうしたら、あなたと同じ年で、1浪して後から入った子は、就職活動もあなたよりも1年後でゆっくりだから、その時はまた、その子のことをうらやましがるんじゃないか。そんなに急いで大学を決めることはないんじゃない」と言いました。というのは、彼女は、すごく他人と自分を比べる子だったのです。でも彼女は、「家の事情もあるから、浪人はしたくない。入学しなくてはならないのです」ということでしたので、私も「それでは、がんばるしかないね」と励ましましたが、やはりちょっと辛く見えた大学生活でした。それでも彼女は、その大学を卒業し、就職しましたが、結局は、就職も彼女が高校時代に私に夢のように語っていた職業とは全く違う職業に就きました。私はその姿を陰ながら応援するしかありませんでした。あの時、もう少し彼女に適した違う言葉かけがなかったかなー、と今でも思うのです。彼女をとおしても、人生長い年月なのだから、あせることはない、ゆっくりゆっくり、という気持ちで、と思っています。実は、そのような思いが私の中にあるのは、私の出自が沖縄ということに関係があるからかもしれません。

沖縄の時間の流れ

沖縄に対しては、皆さん、どのような思い、イメージをもっていますか。私は大阪女学院大学で1コマだけですが、地域研究という講座をもっていて、教室での座学と現地研修と称する沖縄フィールドワークを担当しています。その講義の最初の時間には、どうしてこの講義を受講しようと思ったのか、どんなことを学びたいのか、あなたのイメージする沖縄はどんなところか、ということを質問用紙にして回答してもらいます。そうしますと、ほとんどの学生が、青い空や青い海、自然や食べ物、沖縄戦や米軍基地問題などへの関心を書いてきますが、中には、沖縄の人たちのあの雰囲気が良いから、以前、沖縄に旅行で行って沖縄の人たちの優しさを感じたので……などの回答もあります。では、その沖縄の優しさや雰囲気って何だろうね、何からくるんだろうね、というのが、地域研究の講座で探求していくことになるのですが、私は、そこには、良い意味での沖縄タイム（現地ではウチナー・タイムと呼ぶ）がある、と考えています。沖縄

タイムというのは、沖縄独特の時間の流れ、時間の扱い方です。沖縄タイムを表面上で言えば、決められた時間を守らない、だらだらした沖縄ということになります。でも、本来の沖縄タイムというのは、時間をきっちり守ることも大事ですが、時間よりも、自分の体や周囲とのかかわり、配慮、おもいやり、何よりも人間そのものを大切にする、そうした思いが、やがては、人間は自然には逆らえない、ということの大前提になっているのです。自然には逆らえない。それを示す大きな出来事は、台風です。台風が来たら、全部ストップです。年に数回はそうしたことになります。どんなに、その日（〇月×日）にあれしよう、これしよう計画をしていても、何カ月前からじっくりと準備してきても、いざ台風が来ると、ストップ状態です。台風が通過する2、3日を待つしかないのです。だから、自然とはケンカしない。風とはケンカしない。雨とはケンカしない。特に夏は、日中の暑い時間帯は無理して働かない。休むのです。沖縄の城造り、家造りはそうです。首里城や勝連城など、自然とはケンカしない、むしろ自然と共存する造りになっています。自然と共存するとは、時間をゆるやかに生きることです。それが、生まれ育った私の体内に今も残り、また、地元沖縄に住んでいる沖縄の人たちの中に生きていられるのです。沖縄に行くとき心と体が癒される、ということを書いた学生もいましたが、そうしたことを心身で感じたのでしょう。そうした沖縄の空間、ゆるやかに時間を過ごすということを私たちは必要としています。

休んでいく

今日の聖書には、次の言葉が書かれていました。

「疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。

これは、イエス・キリストの言葉として、聖書に記されています。イエスは、社会の中で、あなたが生きる中で、大人も子どもも、疲れた人、大変な荷物を背負っている者は、わたしのところに来なさい。休ませてあげる、と言うのです。

でも、休んだら、私たちは負けますよね。周りの人が先に行っちゃうんですから。1等賞には何か益がある。だから頑張って、1等賞に向かって走る。ビリケツは、何もないと思い込んでしまう。自分のペースで歩めばよいものを、自分のペースでゴールを目指せばよいものを、社会はそれを許さない。マイペースでは、負け組になってしまいます。そういう恐怖心があります。だからついつい、他人の速さが気になり、ついつい無理をして合わせてしまいます。無理して走ってしまう。無理がたたって、異常が起こる。体が壊れる。精神も負担が大きくなる。

先ほどの大阪女学院大学では、毎年、6月の中旬にリトリート週間と言って、大学全体が休講となり、学年ごとに心も体もリフレッシュさせる時をもちます。特に、その年に入学した新入生は、琵琶湖で1泊2日の合宿みたいなレクリエーションの時をもちます。2年生、3年生たちは、大学の庭でバーベキューなどをします。2泊3日程度の小旅行に行ってくる学生もいます。リトリートをする前と後では、皆さんの表情が変わります。本当にリフレッシュします。

主イエスは、私たちの体、精神のことをよくご存知です。誰でも休みが必要です。特に、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも、わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と呼びかけています。

この休ませてあげる、という言葉は、もっと突き詰めれば、立ち上がらせる、という言葉を含みます。皆さんが町中で見るキリスト教会は、教会の礼拝に来た者たちを休んだままではなく、また新たに立ち上がら

せる場所です。そして、このチャペル・アワーでのひとときは、まさに、皆さんが聖書の言葉を聞いて、心を休ませる時です。体が休憩を必要とするように、心も休息を必要とします。その休息をイエス・キリストは安らぎとして与える、というのです。

沖縄の人たちは、いつもこう言います。

「ユクティ、イキヨー」（その意味は、ゆっくり休んで、行きなさいねー、です）。それを、お互いに交し合っているのです。

「なりたくなりたくなりたい おとなになりたい たい」と音読していた我が家の子どもたちにもONとOFFの切り替えをしっかりとやらないとつぶれるぞ、と言っています。特に今年から新社会人になった娘には休みの大切さを言います。

皆さんが、このチャペル・アワーで、ひととき休んで、また、立ち上がっていく。チャペル・アワーで聖書の言葉を聞いたり、祈ったり、賛美歌を歌ったりしながら、心身共にオアシスの場として活用されたらよいかと思います。どうぞ休んでいかれてください。休みの中で自分を振り返ってください。一牧師として、そう願っています。

2018年5月23日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録